

「新臨床内科学」コンパクト版

国立国際医療センター総長	高久	史磨	監修
癌研究会附属病院院長	尾形	悦郎	
東京大学教授・衛生学	和田	攻	コンパクト版編集
東京慈恵会医科大学教授・内科	橋本	信也	

獨協医科大学教授・第2内科

寺 野 彰

本書は「新臨床内科学」のコンパクト版と銘打っているが、今はやりの縮小版ではなく、ダイジェスト版であるところにその特徴がある。ダイジェスト版であるから当然、一見物足りない面もあるが、親本を参考にすることは当然の前提と言えよう。親本そのものも、“ベッドサイドですぐに、しかも治療に役立つガイドブック”を目指していたようであるが、1,500ページを超える大書となってしまう、その目的に合わなくなったらしい。それを単に縮小版にしないでダイジェスト版にするというのは、新しい本を1冊作り直すに等しいので大変な作業であったと思われる。そして、本書はその目的を達している。

近年、医学の驚異的な進歩に伴って臨床に必要な医学知識は膨大なものとなり、しかも刻々変化していくのであるから、いかに若い医師であってもこれらの知識を up to date にしていくことは不可能に近い。もちろん、狭い専門分野に限ってならばそれも可能であろうが、内科医として病気よりも患者を診るという立

場に立てば、専門分野の知識のみというわけにはいかないのは当然である。特に最近では患者の高齢化現象のため、一人の患者に多くの疾患が同居している。したがって、例えば高血圧の患者を長期間診ていて、結腸癌などを見落としているといったことは頻繁に起こっている。患者さんは内科の医師に診てもらっているのだから安心していただけ、このような見逃しは、信頼の裏切りであるし、訴訟問題になっても仕方がない。このような事態を避けるためにはともかく、編者らも言うごとく、なるべく多くの医学情報を身につけることである。そのことが前提となって初めて医学的思考過程、いわゆる Gedanken Gang の修得が可能となる。

今、各大学などで、内科学の専門分化(分科?)が進められているようであるが、それは一見現代の高度な医学にマッチするようであり、実は反対に、国民の医療に対する期待に反ってきているのではないかと思われる。一種の時代錯誤なのではないか。冷静に反省してみる必要があ

ろう。このような中で本書のごとく内科学全体を見渡し、総合的理解を目指す企画は、貴重である。もちろん本書は国家試験用の安直な how to もの、あるいは傾向と対策といったものではない。1つ1つの記載の中に味わい深いものがみられ、親本を参考にするを前提とすれば、日常診療に大変便利なガイドブックであり、親本に期待できなくなった最初の目的を達することができたようである。

全体のバランスもよく、記載は統一されており、重要な表も多用されている。あえて欲を言えば、全体を把握するためのフローチャートのもの、典型的な模式図などがあればとも思うが、ダイジェスト版としては無理であろうか。学生、研修医のみでなく、臨床の第一線で活躍する内科医あるいはほかの分野の医師にも convenient and informative な書として勧めることができる。

● 四六判 624頁 図25 1994
定価 6,798(税込) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)